

実験動物の技術と応用 実践編 増補改訂版（第三刷）にあたっての訂正点

訂正箇所	訂正前（初版、第二刷）	訂正後（第三刷）
p. 147 右欄、タイトルの脱字 訂正	「作業別腰痛予防対」	「作業別腰痛予防対策」
p. 175 右欄、「表 10-24 微生物モニタリングの検査法と主な対象微生物」の対象微生物のカテゴリー分類の訂正	<i>Citrobacter rodentium</i> <u>(B/C)</u> <i>Pasteurella pneumotropica</i> ※ <u>(C)</u> <i>Pseudomonas aeruginosa</i> <u>(D/E)</u> <i>Staphylococcus aureus</i> <u>(D/E)</u>	<i>Citrobacter rodentium</i> <u>(C)</u> <i>Pasteurella pneumotropica</i> ※ <u>(D)</u> <i>Pseudomonas aeruginosa</i> <u>(D)</u> <i>Staphylococcus aureus</i> <u>(D)</u>
p. 225 「2) 系統の特徴」の上から 1 行目の誤字訂正	「リンパ <u>系</u> 白血病～」	「リンパ <u>性</u> 白血病～」
p. 266 「2. 骨格系」の項、上から 1 行目	「骨の数は <u>生体</u> で 256～261 個であるが、～」	「骨の数は <u>成体</u> で 256～261 個であるが、～」
p. 275 右欄、「シリアンハムスターの感染実験」の項、ウイルスの名称の訂正	「～ (SARS <u>Cov</u> -2) ～」	「～ (SARS <u>CoV</u> -2) ～」
p. 288 ② 実験動物としての特性と使用分野の項 上から 7 行目及び右欄の項目名及び説明文中の試験法の名称修正 (試験法の名称が変更されたため)	「 <u>生殖・発生毒性試験</u> 」	「 <u>生殖発生毒性試験</u> 」
p. 307 右欄、「表 6-4 臨床症状の観察ポイント」の 3. その他の項（誤字訂正）	・ 体重、 <u>体重</u> 、心拍数、呼吸数	・ 体重、 <u>体温</u> 、心拍数、呼吸数

（次頁に続く）

「表 6-5 イヌの人獣共通感染症」
(誤)

表 6-5 イヌの人獣共通感染症

分類	病名	病原体名	症状	
			イヌ	ヒト
ウイルス性疾患	狂犬病	Rabies virus	発熱、元気消失、性格・行動の変化、徘徊・不眠、鳴き声の変化、噛みつき、流涎、意識低下、呼吸麻痺	不安、興奮、錯乱
細菌性疾患	レプトスピラ症	<i>Leptospira interrogans</i>	発熱、元気消失、黄疸、血尿・血便	発熱、悪寒、頭痛・筋肉痛、黄疸
	ブルセラ症	<i>Brucella Canis</i>	雄：精巣炎・前立腺炎 雌：流産、死産	発熱、筋肉痛
	パスツレラ症	<i>Pasteurella multocida</i>	ほとんど無症状	受傷部位の発赤・腫脹、リンパ節腫大、蜂窩織炎、敗血症
	皮膚糸状菌症	<i>Microsporum canis</i> など	鱗屑、発赤・発疹、円形脱毛	鱗屑、発疹、痒み、白癬疹
寄生虫性疾患	イヌ糸状虫症	<i>Dirofilaria immitis</i>	発咳、削瘦、被毛粗造、浅速呼吸、腹部膨満（腹水貯留）、血尿	リンパ管炎、リンパ節炎、象皮病
	多包条虫症	<i>Echinococcus multilocularis</i>	ほとんど無症状	上腹部膨満・不快感、発熱、黄疸



(正: 訂正部位赤字)

表 6-5 イヌの人獣共通感染症

分類	病名	病原体名	症状	
			イヌ	ヒト
ウイルス性疾患	狂犬病	Rabies virus	発熱、元気消失、性格・行動の変化、徘徊・不眠、鳴き声の変化、 咬 みつき、流涎、意識低下、呼吸麻痺	不安、興奮、錯乱
細菌性疾患	レプトスピラ症	<i>Leptospira interrogans</i>	発熱、元気消失、黄疸、血尿・血便	発熱、悪寒、頭痛・筋肉痛、黄疸
	ブルセラ症	<i>Brucella canis</i>	雄：精巣炎・前立腺炎 雌：流産、死産	発熱、筋肉痛
	パスツレラ症	<i>Pasteurella multocida</i>	ほとんど無症状	受傷部位の発赤・腫脹、リンパ節腫大、 蜂 窩織炎、敗血症
真菌性疾患	皮膚糸状菌症	<i>Microsporum canis</i> など	鱗屑、発赤・発疹、円形脱毛	鱗屑、発疹、痒み、白癬疹
寄生虫性疾患	イヌ糸状虫症	<i>Dirofilaria immitis</i>	発咳、削瘦、被毛粗造、浅速呼吸、腹部膨満（腹水貯留）、血尿	リンパ管炎、リンパ節炎、象皮病
	多包条虫症	<i>Echinococcus multilocularis</i>	ほとんど無症状	上腹部膨満・不快感、発熱、黄疸

訂正・追加箇所	訂正前（第一、二刷）	訂正後（第三刷）
p. 312 「4. 麻酔、(1) 麻酔法」の項、上から2～4行目（一部削除と追記）	「～、プロポフォール、アルファキサロンやメデトミジン+ミダゾラム+ブトルファノール三種混合麻酔薬（MMB）等がある。ケタミンは麻薬であるが、キシラジンやメデトミジン等を併用する～」	「～、プロポフォール、アルファキサロン等がある。ケタミンは麻薬であるが、キシラジンやメデトミジン等の鎮静薬を併用する～」

(次頁に続く)

「表 7-6 ネコの人獣共通感染症」
(誤)

表 7-6 ネコの人獣共通感染症

分類	病名	病原体名	症状	
			ネコ	ヒト
細菌性疾患	ネコひっかき病	<i>Bartonella henselae</i>	ほとんど無症状	咬まれたり、引っ掻かれた部位の発赤
	パスツレラ症	<i>Pasteurella multocida</i>	ほとんど無症状	隆起、化膿性痂皮、リンパ節腫大
	皮膚糸状菌症	<i>Microsporum canis</i> など	鱗屑、発赤・発疹、円形脱毛	鱗屑、発疹、痒み、白癬疹
寄生虫性疾患	トキソプラズマ病	<i>Toxoplasma gondii</i>	幼猫：下痢、神経症状、肺炎 成猫：ほとんど無症状	妊婦が初感染を受けた場合、先天性トキソプラズマ症状（胎内死亡、流産、網脈絡膜炎、水頭症など）の発症
	回虫症	<i>Toxocara cati</i>	幼猫：嘔吐・下痢、被毛粗造、体重低下 成猫：ほとんど無症状	内臓幼虫移行症、眼幼虫移行症
	疥癬症	<i>Notoedres cati</i>	黒い耳垢、激しい痒み、皮膚炎	湿疹、痒み、皮膚炎



(正: 訂正部位赤字)

表 7-6 ネコの人獣共通感染症

分類	病名	病原体名	症状	
			ネコ	ヒト
細菌性疾患	ネコひっかき病	<i>Bartonella henselae</i>	ほとんど無症状	咬まれたり、引っ掻かれた部位の発赤
	パスツレラ症	<i>Pasteurella multocida</i>	ほとんど無症状	隆起、化膿性痂皮、リンパ節腫大
真菌性疾患	皮膚糸状菌症	<i>Microsporum canis</i> など	鱗屑、発赤・発疹、円形脱毛	鱗屑、発疹、痒み、白癬疹
寄生虫性疾患	トキソプラズマ病	<i>Toxoplasma gondii</i>	幼猫：下痢、神経症状、肺炎 成猫：ほとんど無症状	妊婦が初感染を受けた場合、先天性トキソプラズマ症状（胎内死亡、流産、網脈絡膜炎、水頭症など）の発症
	回虫症	<i>Toxocara cati</i>	幼猫：嘔吐・下痢、被毛粗造、体重低下 成猫：ほとんど無症状	内臓幼虫移行症、眼幼虫移行症
	疥癬症	<i>Notoedres cati</i>	黒い耳垢、激しい痒み、皮膚炎	皮疹、痒み、皮膚炎

(次頁に続く)

訂正・追加箇所	訂正前（初版、第二刷）	訂正後（第三刷）
p. 322 「5. 麻酔法」の 項、上から 4～5 行 目（一部削除と追 記）	「ネコの全身麻酔に汎用される注 射麻酔薬にはチオペンタールナト リウム、塩酸ケタミン、 <u>メデトミ ジン</u> 、 <u>ミダゾラム</u> 、 <u>プロポフォール</u> 等がある。ケタミンは麻薬指定 されているが、メデトミジンやミ ダゾラム等を併用する～」	「ネコの全身麻酔に汎用される注 射麻酔薬にはチオペンタールナト リウム、塩酸ケタミン、プロポフ オール等がある。ケタミンは麻薬 指定されているが、メデトミジン やミダゾラム等の <u>鎮静薬</u> を併用す る～」
p. 322 表 7-10 ネコの主 な注射麻酔薬の脚 注 (スペルミス)	「Laboratory Animal Anaesthesia 4th ed., P. <u>Fleckell</u> , 2016 の Table 5.15 から一部抜粋して掲 載」	「Laboratory Animal Anaesthesia 4th ed., P. <u>Flecknell</u> , 2016 の Table 5.15 から一部抜粋して掲 載」
p. 329 「表 8-7 その他の 感染症」 ブタマイコプラズ マ肺炎の病原体名 の欄	「 <u>Mycoplasma hyopneumoniae</u> 」	「 <u>Mycoplasma hyopneumoniaes</u> 」
p. 329 「表 8-7 その他の 感染症」 病名の欄	「 <u>グレーザー病</u> 」	「 <u>グレーサー病</u> 」
p. 329 「表 8-7 その他の 感染症」 グレーザー病の病 原体名の欄	「 <u>Hemophilus parasuis</u> 」	「 <u>Haemophilus parasuis</u> 」
p. 329 「表 8-7 その他の 感染症」 豚肺虫症の病原体 名の欄	「 <u>Metastrongylus apye</u> 」	「 <u>Metastrongylus elongatus</u> 」
p. 329 「表 8-7 その他の 感染症」 クリプトスポリジ ウム症の病原体名 の欄	「 <u>Cryptosporidium parvum</u> 」	「 <u>Cryptosporidium parvum</u> 」
p. 332 「3) 鉄剤の投与」 の項、最終行	「ミニブタも <u>同様である</u> 」	「ミニブタも徐々に貧血状態に なるため、鉄剤の投与を行うこ とがある。」
p. 338 表 9-3 マカク属サ ル類の歯式 表の欄外の「歯 式」の訂正	「歯式: I2/2, C1/1, <u>P3/3, M2/2</u> 」	「歯式: I2/2, C1/1, <u>P2/2, M3/3</u> 」

(次頁に続く)

訂正・追加箇所	訂正前（初版、第二刷）	訂正後（第三刷）
p. 346 右欄、「子の発育」 誤記載（記載欄の誤り）の訂正	<u>性皮や子宮頸管粘膜の性状を観察する方法のほか、尿中のエストロジェンや血中の黄体形成ホルモン（LH）やプロゲステロンを測る方法、個体ごとの月経周期から推定した排卵時期を基準とする方法、膣垢像の観察、卵巣の触診、体温測定等の結果から推測する方法がある。</u>	<u>出生子の体重は、カニクイザルで 300～350g、アカゲザルで 470～500g、ニホンザルで 500～550g 程度である。新生子は、被毛で覆われ、出生当日から母親にしがみついて乳を吸う。臍帯は、普通生後 3 日以内に脱落する。生後 1 週間以内に一時的な体重減少があるが、約 2.5 か月齢で出生時体重のほぼ 2 倍となり 12 か月齢はおおよそ 5 倍の体重になる。</u>
p. 365 「1. 感染性疾患」の項 上から 1～12 行目 （家畜伝染病予防法の表記に修正する）	「多くの感染症が知られており（表 10-2）、とくに発生時の被害が深刻な 5 つの疾病（ <u>家禽コレラ、高病原性・低病原性鳥インフルエンザ、ニューカッスル病、家禽サルモネラ症</u> 〔 <u>雛白痢と家禽チフス</u> 〕が家畜伝染病予防法における <u>監視伝染病</u> に、発生状況を報告すべき 12 疾病（ <u>鶏痘、低病原性ニューカッスル病、マレック病、鶏伝染性気管支炎、鶏伝染性喉頭気管炎、伝染性ファブリシウス嚢病、鶏白血病、鳥結核、鶏マイコプラズマ症、ロイコチトゾーン病、家禽サルモネラ症、鳥インフルエンザ</u> ）が届出伝染病に指定されている。主な細菌感染症には <u>雛白痢、伝染性コリーザ、マイコプラズマ症、家禽サルモネラ症</u> 、ウイルス性疾患には <u>鶏痘、ニューカッスル病、鶏伝染性喉頭気管炎、鶏伝染性気管支炎、鶏脳脊髄炎、マレック病、鶏白血病、伝染性ファブリシウス嚢病、鳥インフルエンザ、原虫感染症にはコクシジウム症、ロイコチトゾーン病</u> がある。」	「多くの感染症が知られており（表 10-2）、とくに発生時の被害が深刻な 5 つの疾病（ <u>家きんコレラ、高病原性鳥インフルエンザ、低病原性鳥インフルエンザ、ニューカッスル病</u> 〔 <u>農林水産省令で定めるものに限る</u> 〕、 <u>家きんサルモネラ症</u> 〔 <u>雛白痢と家きんチフス</u> 〕が家畜伝染病予防法における <u>家畜伝染病</u> に、発生状況を報告すべき 12 疾病（ <u>鶏痘、低病原性ニューカッスル病、マレック病、鶏伝染性気管支炎、鶏伝染性喉頭気管炎、伝染性ファブリシウス嚢病、鶏白血病、鳥結核、鳥マイコプラズマ症、ロイコチトゾーン症、サルモネラ症</u> 〔 <u>特定のものに限る</u> 〕、 <u>鳥インフルエンザ</u> ）が届出伝染病に指定されている。主な細菌感染症には <u>伝染性コリーザ、鳥マイコプラズマ症、家きんサルモネラ症</u> 、ウイルス性疾患には <u>鶏痘、ニューカッスル病、鶏伝染性喉頭気管炎、鶏伝染性気管支炎、鶏脳脊髄炎、マレック病、鶏白血病、伝染性ファブリシウス嚢病、鳥インフルエンザ、原虫感染症にはコクシジウム症、ロイコチトゾーン症</u> がある。」
p. 371 表 11-2 麻酔段階とその行動的特徴 「魚の状態」の欄 （誤字訂正）	「 <u>軽度沈静</u> 」 「 <u>重度沈静</u> 」	「 <u>軽度鎮静</u> 」 「 <u>重度鎮静</u> 」

（次頁に続く）

訂正・追加箇所	訂正前（初版、第二刷）	訂正後（第三刷）
p. 375 「1. ショウジョウバエ、(1) 実験動物としての一般的特性ならびに使用分野」の項、13～14行目 (学名の訂正)	「～キハダショウジョウバエ (<i>D. <u>melanogaster</u></i>) 、～」	「～キハダショウジョウバエ (<i>D. <u>lutescens</u></i>) 、～」
索引 p. 386	<u>家禽</u> コレラ 365 <u>家禽</u> サルモネラ感染症 365 <u>家禽</u> チフス 356	<u>家きん</u> コレラ 365 <u>家きん</u> サルモネラ感染症 365 <u>家きん</u> チフス 356
p. 389	三種混合麻酔薬 246	三種混合麻酔薬 <u>205</u> 、 <u>246</u> 、 <u>262</u>
p. 390	生殖・発生毒性試験 288	生殖発生毒性試験 288
p. 395	ロイコチトゾーン <u>病</u> 365	ロイコチトゾーン <u>症</u> 365

以上